

# インドの家族

東方学院専任研究生

清水晶子

はじめてインドの地を踏んでからもう五年が経つ。一九八三年一〇月から八五年一二月末までデリー大学の仏教学科に在籍した。学生ビザをもらうまでに二年半待たされた挙句の渡印だった。私のインドでの生活は大家族（ジョイント・ファミリー）のお宅にご厄介になることから始まった。大学の寮に入るまで三週間お世話になった。そこは大学に隣接する町の一郭にある、出版社兼書店を経営するかなり裕福な家庭であった。家族構成は祖父母と五人の息子た

ちとその家族で、三世代一八名だった。インドでも都市部では核家族が増えてきたとはいっても、今でもこのお宅のような伝統的な大家族も決して珍しくはない。

表通りに面した一区画の半分ほどのコンクリート作りの大きな建物が住まいである。一階が本屋、二階と三階が家族用の住居になっている。それぞれの家族が部屋を持ち独立している。ちやうど日本のマンションのような所に家族別に住んでいるような感じである。大きな居間と台

所が共用となっている。独立した家族用の部屋がありながら、皆この居間に集まってくる。インド人は一般に一人で部屋に居ることをあまり好まないようである。私もお客用の個室を与えられていたが、なるべく居間で家族の人たちと過ごすようにしていた。知らない土地へ一人でやって来た私を、家族同様にあたたかくもてなしていただいた。おかげ様でインドでの生活にもすぐとけ込むことが出来たし、その後も何かとお世話になり、二年余の留学中に一度もホームシックにかからなかった。

このお宅には、学齢期の子供たちが五人いたが、全員キリスト教系の私立の名門校に通っていた。きちんとした制服を着用し、家の近くまで来るスクールバスに乗って通学していた。すでに小学校の一年生から英語のテキストを使用し、国語以外は英語で授業を受けているということだった。日常の会話はヒンディー語を使っ

ているが、四年生くらいになればかなり流暢に英会話ができる。授業はだいたい一時には終わり、帰宅して昼食を摂る。宿題も毎日出される。子供たちはいつもたくさん教科書を持って登校していた。勉強の方もなかなか大変のようだった。一つ気がついたことがあった。この子供たちが路地に出て近所の子と遊んでいるのを一度も見ることがなかった。いつも自宅の中庭で自分たちだけで卓球やバドミントンをしてい



るか、ビデオを見ていた。現在でもインドの社会には昔からのカースト制という階級制度が厳然として根強く残っている。だから、子供たちの間でも誰とでも自由に遊ぶということがないのだろうか。二、三軒先の店にお菓子を買いに出るくらいで、子供たちだけで遊びに行くなどということは許されていないようだった。そう言えば、大きい子供でも公共のバスに乗ったことがないと言っていた。

大家族と共に暮らしている主婦の一日は多忙である。一人一人が交代でその日の家事当番を担当する。家族全員の食事の仕度、市場までの材料の買い出し、通いの洗濯屋へ出す洗濯物の枚数と受け取りの勘定（なくされないために）、子供たちの世話、そして使用人に対する監督など。

この家の屋上には、住み込みの数人の使用人の部屋があった。実際は彼らこそこの家で最も

忙しい人たちで、それぞれに自分の持ち場が決まっっていて、他人の仕事には決して手を出さない。それで大家族の家では自然と使用人の数も多くなる。彼らは早朝から夜遅くまでよく働く。というより働かされている。はじめのうちは、日本との習慣の違いもあって自分でできることはなかなか頼めなかった。また家の子供たちが学校から戻って来て、卓球に興じているその足元を、同じ年くらいの使用人の男の子がもくもくとふきそうじをしているのを見たりすると何とも複雑な思いがした。

大家族の中で生活していると、自分の世界だけを持つことができない。束縛感を感じることもあるが、家族の中でのあるべき自分の立場というものが見えてくる。小さいときからその中でいかにふるまうべきかを、自然と体得していくようである。家長の祖父を中心に家族の絆は堅い。